

やはり一色いろはは先輩と同じ大学に通いたい。

さくたろう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

高校三年に進級した一色いろは。

八幡と同じ大学に進学するため、友人の誘いで塾に通うことを決意する。

そこで思いがけない再会を果たす。

ども、さくたろうです。

普段はpixivで短編投げたりします（・ω・）

今回はハメ用のシリーズ書いてみたんで良かったら読んでみてください！

Pixiv <http://www.pixiv.net/member.php?id=9357622>

|        |        |        |        |        |    |    |    |    |    |    |    |    |   |               |
|--------|--------|--------|--------|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|---|---------------|
| 1<br>4 | 1<br>3 | 1<br>2 | 1<br>1 | 1<br>0 | 9  | 8  | 7  | 6  | 5  | 4  | 3  | 2  | 1 | プロ<br>ロー<br>グ |
| 64     | 60     | 56     | 52     | 48     | 44 | 40 | 35 | 30 | 26 | 21 | 16 | 11 | 6 | 1             |

目  
次

## プロローグ

「はあ……」

七月の太陽の光が溶けた水銀のような輝きとは裏腹に、わたしは一つの悩みを抱えていて――。

先輩たちが総武高を卒業してから4ヶ月。

受験生になったわたしは、進学先について悩んでいた。

「おっはよーいろはー!」

「あ、おはよ、碧」

慣れ親しんだ通学路を歩いている途中、友人の碧に後ろからぽんと肩を叩かたので挨拶を返す。

すると、何やらわたしの顔を覗き込んで心配そうに口を開く。

「どうしたの? 朝から暗い顔しちゃって」

「んー……いろいろとね……」

「なにになにー? 悩みがあるなら言ってみなよ。力になるからさ!」

「うーん。あのね……」

そして、わたしの悩みを碧に打ち明けることにした。

だって碧言いだしたら聞かないし……。それに、友達がそう言ってくれるのは素直に嬉しいから。

「実はね、この前の模試で志望校C判定だったんだ……」

「ああ……、それで悩んでたんだ」

「うん、でね……。なんていうか……うう」

「なにになに? どうしたの?」

「碧、絶対誰にも言わないでよ!」

「任せて任せて! あたし口堅いし!」

ホントかなあ。心配なんだけど……。

でも、ここまで来たら言っちゃうしかないよね……。

「えっと……、わたしがその大学を目指すのって、その……憧れてる先輩がいるからなの」

「ほうほう、いろはの想い人がいるってわけね!」

「ち、違うからっ! そんなんじゃないの!」

「ふふっ照れてる照れてる。ホント可愛いねえいろはは」

「むうー。……だからね、わたしどうしても先輩と同じ大学に通いたいの」

ホント、わたしっただけ先輩と同じ大学に通いたいんだろうなあ……。

でも、それくらいわたしは先輩が好き。

この想いは他の誰にも、もちろんあの二人にだって負けるつもりはないから——。

わたしの相談を聞いた碧は、顎に手を添えながら真剣な表情をしている。

こうして見ると、碧ってやっぱり綺麗だなあ。なんでこの子彼氏いないんだろう。わたしが男なら放っておかないのに。

「あ、いろはは！」

ちょうど学校の門に到着したとき、いい案をみつけたのか碧が微笑んだ。うん、やっぱり可愛いなこの子。わたしも負けてないけど。

「ん、どうしたの？」

「あんたさ、あたしと同じ塾に通わない？」

「塾……？ 予備校じゃなくて？」

「そ、塾。あたしの知り合いのお姉さんが経営に携わってるんだけどさ、そのへんの予備校なんかより断然安いし、結構教え方も上手なのよ」

「塾かあ……」

予備校よりも安いっていうのはちよつと魅力——いや、かなり魅力的かな。お金がかかると思って予備校に行くのはちよつと躊躇ってたけど、それなら……。

「ちなみに場所はどのあたりなの？」

「えつと、コミュニティセンターってあるじゃない？」

「うん」

もちろん知ってる。あそこは先輩との思い出がある場所でもあるから。

「その近くなんだけど、どう？ もし、いろはに行く気があるならあた

しから話しておくし。上手くいけば更に安くなるかもしれないよ」「ほんとう!?!」

ああ、神様仏様碧様! 授業料が安くなるっでもう碧が神様に見えるよ。持つべきものは友人って本当だなあ。

「是非、お願いします!」

わたしは碧に向かって頭を深々と下げ、精一杯のお辞儀をした。

\* \* \*

放課後になり、わたしは碧に案内されて今後お世話になる予定の塾に向かっている。

あれから碧が知り合いのお姉さんに聞いてくれたらしく、大歓迎だと言われたみたいで。

それを聞いてわたしも両親に連絡をした。

もちろん、普通の予備校よりも安く、評判のいい塾ということをつけ加えて。そっちの方が交渉に有利になるに決まってるもんね。

すると、両親も『それならそこで頑張ってみなさい』と、快く承諾してくれた。ありがとう、お母さん。

「着いたよいろは」

「あ、ホントに近いね。こんなところに塾なんてあったんだあ」

辿り着いた塾は、コミュニティーセンターと目と鼻の先。

二階建ての建物には『スノーゼミナール』と書かれた看板が掲げられている。

前に先輩と来てたとき、こんな塾あったかな?

「この塾ができたのは四月だからね。でも、この辺だと既に人気なんだよ? 講師もいい人が多いしね」

「そうなんだ。でも、それだったら定員とかあるんじゃないの?」

「だね。まあいろははあたしのコネがあるから。ちゃんと感謝してよね?」

「うっ……ありがとうございます」

「よろしい! じゃあいこっか」

「うん」

碧の後に続き、ガラス窓の自動ドアを潜り中に入る。

今日はお金とか書類がまだだから入会手続きができないけど、碧の知り合いのお姉さんの好意でお試しで講義に参加させてもらえるらしくて。

ホント碧には感謝しなくちやなあ……。

ロビーから廊下を少し歩くと、ドアが開いたままの少し広めの部屋の前にやってきた。

「今日はこのクラスで講義があるから。さ、入ろ？」

「ちなみに講義って何するの？」

「これから受けるのは現文、その後は英語だけど……。どうする、どっちも受ける？」

「うーん。お試しだしとりあえず今日は現文だけ受けてみようかな？」

「そうね、今日はそれでいいかもね。じゃ、席につこっか」

空いている席に二人並んで座る。わたしたちの他には男女合わせて生徒が数人。

こういうところって、大人数で受けると思ってたけどそうでもないのかな？

「ほら、これ教材ね。一緒に見よ」

「あ、うん。なにからなにまでごめんねえ」

「いいからいいから。この借りは必ず返してもらおうし！」

にかつと笑う碧を見てどきつとする。……いや、まってまってわたしそつちの気はないからね!?

今のはただ不意打ちにやられちゃっただけで――

心の中でそんな言い訳をしていると、講義開始のチャイムが鳴り出す。

同時に談笑していた生徒も前を向き始める。

「そういえば、講師ってどんな人なの？」

碧に素朴な疑問を投げる。

「ああ、現文はちよつと変わっててねー。〇〇大学の一回生が――」

「すまん、遅れた……」

碧が言い切る前にドアからスーツ姿の男性が慌てて入ってくる。

教壇の前の立ち息を整えると、辺りを見渡して――

「先輩……？」

相変わらず死んだ魚のような目をした、わたしの想い人がそこに立っていた。



「先輩……？」

「一色？ おま、えっ!？」

思わぬ再会に、わたしは口が勝手に動いてて。

でも、先輩はわたし以上に驚いてるみたいだった。わたしの顔を見るなり、幽霊でも見たようなリアクションをするんだもん。

さすがに失礼すぎませんか先輩？ わたしなんて、先輩に会えただけでこんなにも胸がドキドキって高鳴ってるのに。むうー、なんか悔しいんですけどー……。

「先生ー、早く始めてくださいー」

「ああつと、すまん……えつと、きよ、今日はここから始めるから」

先輩が状況を上手く把握出来ずに固まっていると、前の席の女の子が注意した。

慌てて教材を開き、ホワイトボードに書き始める。

先輩が板書をしている最中、さつき先輩を注意した女の子が急にぐりと振り向いた。

「っ——!？」

え、なんで今わたしを睨んだの？

意味がわからないんですけど……。

困惑しているわたしを置いたまま、女の子は何事もなかったようにホワイトボードに視線を戻してしまった。

ホントなんだったんだろ……。授業遅れたことに怒ってるのかな。

「ねえねえ〜」

わたしが悩んでいると、横にいる碧がウキウキしながら見つめてくる。

なんだろう。その顔、すっごくバカにされてるみたいで腹立つ……！

「なに……？」

「比企谷先生でしょ、あんたの好きな人」

「なっ——な、ななななにいつてるのかな碧ちゃん？ わ、わたしが？  
ないないありえない絶対ないから！」

「そこ、静かに」

思ったよりわたしの声が大きかったのか、板書をしていた先輩に注意される。

「す、すみません……」

先輩が再び板書に戻ると、隣の碧がくすくすと笑いを堪えている。  
なんなのもう……碧のばかばかばか！ 先輩に怒られたんですけ  
ど！

今日のわたしの感謝の気持ち返して？ っていうかホント碧さん  
は何言ってるんですか？ 全然意味がわかりません。大体なんで気  
づくの？ そんなにわたしってわかりやすい!?

「ばればれだよ、いろはちゃん」

碧はキメ顔でそう言った。

「碧、少し黙ろっか」

わたしはキレ顔でそう言った。

「ひっ——!?!」

「あんまり変なこと言っちゃだめだからね？」

「わかったからその顔やめて？ 怖いから……」

む、こんな可愛いぴちぴち女子高生に向かって怖いって、失礼し  
ちやうなあ。

大体、全部碧が悪い碧が。

「でもさあ」

それでも碧は懲りてないらしく、話を続ける。

「実際のところどうなの？ あんな顔したいろは、あたしみたことな  
いよっ。」

「あんなって？」

「なんていうのかなあ。まるで『あつ、わたしの王子様に会えた!』み  
たいな？ すっごい乙女な感じ。いや、あれはむしろメスの顔をして  
——」

パァンという音が室内に響き渡り、先輩を含め授業を受けていた生

徒たちが一斉にこちらに振り向く。

わたしは手にしてた教材を前に突き出し、必死に言い訳を考えて、

「あ、えっと、大きな蚊がいましたー……」

「はあ……。一色、少しは大人しくしててくれ」

「はい……すみません」

なんでこうなっちゃうんだろう……。原因はわかってるけど。

隣で鼻をさすっている碧をキツと睨む。

「いろは、いたひ……」

「碧が悪いんだからね」

「でもあれね、その反応は当たりってことよね」

「なんでそうなるのかな……」

「だっていろは、違うなら本当に興味なさそうに聞き流すでしょ。いつもそうだし」

まったく……。この子はわたしのことよく見てるなあ……。

「はいはい、白状すればいいんですよ。碧の言うとおりだよ」

「やっぱりねー」

うんうんと頷く碧。

まあ碧ならほかの人に言いふらすとかそんなことは——しそう。凄くしそう。

「安心していろは。この秘密は墓場まで持つていくからっ」

親指を伸ばした拳をわたしの目の前に突き出し、にかっと思笑む碧。

「ごめんね、不安しかないよ……」

「でもねー」

「うん?」

急に碧は表情を変え、意味ありげな様子で話始める。

「比企谷先生のことなんだけどさ」

「先輩が? どうしたの?」

「実はうちの塾の生徒たちに割と人気あるんだよね。特に女子に」

「えっ……。なんで? だって先輩だよ? 目に生気なくて猫背だし、いつもやる気なさそうでめんどくさがりでいいところないの?」

あれ、わたしもしかしてひどいこと言ってる？

「あんた……さすがにそれは比企谷先生可哀想だから。……まあなんていうかさ。なんだかんだあの人面倒見がいいんだよね。だから結構慕われてるわけよ」

「ああ……」

それはわかる。痛いくらいわかる。あと先輩って年下に甘いところあるし。ソースはわたし。

確かに、そういう先輩のいいところを知ったら好意を抱いてしまうのも無理もない。

「さつきあんたのこと睨んだ女の子いたじゃん？」

「うん。あつ……」

要するに、さつきのはわたしに対する威嚇だ。

急に湧いてきた敵に対する……。

でも、それはわたしだって同じだ。こっちは散々自分よりも素敵な先輩のライバルが二人もいた中頑張ってきたんだから——。

ただ、さつきの女の子はこの三ヶ月、わたしの知らない先輩と過ごしたんだろうなと思うと、少しだけ心がチクツとなった。

「そゆこと。それと……」

「まだなにかあるんだ……」

割と、今までの話だけでおなかいっぱいなんだけどなあ……。

「あたしの知り合いのお姉さんも比企谷先生を買ってるのよねー。先生を誘ったのお姉さんらしいし」

「え、碧の知り合いのお姉さんって——」

質問を言い終える前に授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。

「ん、じゃあ今日はここまで。また明日あるやつはその時にな」

先輩の挨拶にみんながお疲れ様でしたと返す中、さつきの女の子が先輩に近寄っていく。

「お疲れ様です、先生っ」

「おいこら……三崎。そういうのやめて？」

見ると、先程の女の子が先輩の腕にしがみついている——は？

何しちやってるのこの子？

そこはわたしのポジションの予定なんですけど！

「も、もうあれだ。お前ら次あるだろ。んじや俺はいくから」

先輩がそう言って三崎という女の子の腕を剥がし、退室した。

いろいろと言いたいこともあるけれど……。特に三崎さんに腕を掴まれて照れてたところとか。

でも、それよりせっかく会えたのに全然喋れなかったのが寂しくて。

「なにしょぼくれてるの。先生なら今日はもう終わりだし、追いかけてみたら？」

「え、ホント？」

「うん、今日はもう帰るだけだと思うよ。いろはももう終わりなんだし、行ってきな」

碧、グツジョブ！

わたしはグツと小さくガツツポーズをとり、帰り仕度を済ませ教室を飛び出した。

まるで仕事疲れのサラリーマンのように歩く先輩。  
気づかれないように後ろにポジションを取って、

「お仕事お疲れさまです」

と、耳元で囁き、終わり際に「ふっ」と息を吹きかける。

「ヴおあ!？」

先輩の身体が大きく跳ねて、その場から素早く離れる。

というかなんですかその「ヴおあ!？」って。

わたしまで驚いちゃったじゃないですか!

「きゅ、急に何すんだよ!？」

「先輩がお疲れのようでしたので、元気つけてあげようかなと思って」  
可愛らしさを全面に押し出しながらえへっと笑い、先輩の腕を取  
る。

久しぶりに可愛い後輩からこんな笑顔を向けられたら先輩だつて  
きつと——。

「そういうのいらなからな?　つかお前は狙いすぎ。それにあざと  
すぎ」

だめでしたっ!!

先輩はそう言い放つと、わたしから顔をぷいっと背けてしまう。

いや、でもわかってましたし?　久しぶりでちよつと先輩にじゃれ  
たかっただけですし!

それにしたつて、さっきの子に腕を掴まれてたときはもつと照れて  
たくせに……。ぐぬぬ……。

「……んで、なんでお前ここにいるわけ?」

「えつと、友達の紹介でここに通うことになったんですよ」

「ああ、白楽か……」

「です。今日はお試して授業を受けれるって言われたので、き  
ちやいました♪」

「その『彼氏の家に勝手に来ちゃった♪』てきな言い方でいうのやめて  
くんない?　ゾクツとするわ」

それはわたしも言いたいんですけど。わたしの真似しながらその台詞はちよつと、というかかなり引きます。ドン引きです。

虫を見るように先輩を睨んでみると、ぼつが悪そうに話を変える。

「あ、あれだ。一色ももう受験生だもんな。志望校はどこなんだ？」

先輩の質問に一瞬どきつとする。

ここで、先輩にわたしの志望校を教えたらどうなるんだろう。

応援してくれるかな？

それとも、いつものようにめんどくさそうな態度をとるんだろうか。

……今先輩に教えるのはやめておこう。

「△△大学です」

わたしは嘘をついた――。

「へえ、結構いいところ狙ってるんだな」

「ま、まあわたしくらいになれば当然ですよ」

「それならいいけど、授業中は静かに頼むぞ？」

「うっ……」

「他の奴らに迷惑かかるからな」

「――っ!？」

先生らしく注意しながら、先輩は自分の手をわたしの頭にぽんと乗せる。

思いもよらない不意打ち――。

ううん、先輩のお兄ちゃんスキルが勝手に発動したんだ。

それでも、大好きな人がわたしに触れてくれていると考えると、顔がかあつと熱くなって。

今の顔を先輩に見られたくなくて俯く。

「あ、わりい……。その、なんだ。小町に対するお兄ちゃんスキルがだな」

「……知ってます」

先輩は今どんな顔をしているのかな？ と気になって伏せていた顔を上げると――

先輩と目が合ってしまった。それも頬を赤く染めた先輩と。

なんだ……先輩だって照れてるんだ。

わたしだけじゃなかったと一安心してると、

「お前、熱でもあるのか……?」

予想してなかった言葉が。

どうやらわたしの顔は想像以上に赤くなってるみたいだ……。

わたしのばかばかばか！ 興味本位で先輩の顔なんて覗くんじやなかったよお……。

「えっと、マジで大丈夫かお前？」

「だ、大丈夫です！ 全然ホントに！」

「そうか……? ならいいんだけど」

「は、はい」

「……んじゃ、俺はそろそろ帰るからまた今度な」

先輩が向き直り、歩きだそうとする。

もっと、もっと先輩と話したい。せつかく会えたのに。

——気がついたらワイシャツの裾を掴んでいた。

「……一色？」

えーっと、えーっと。掴んだのはいいんだけど、次にわたしの取るべき行動ってなに？ というかなんでわたしはワイシャツ掴んでるの……? ああ、もうっ！

「あ、つと……、その、やっぱりちよつと具合悪いみたいなので、よかつたら送ってもらえませんか……?」

もう一度、嘘をついた。先輩と少しでも一緒にいたいと思ったから。

神様だつてこれくらい許してくれるよね……?」

それから少しの間があつて。

「……少し待ってろ。帰る用意してくるから」

「はい……」

歩き出す先輩の後ろ姿を見ながら、わたしは火照った顔をなんとか冷まそうと努力した。

今日のわたしは少しおかしい。というのも、三ヶ月ぶりに先輩に会えたことが原因だと思う。というかそれしか考えられないし。それ



までは毎日のように会ってたわけだし。

それが卒業ときっかけにぴたりと終わってしまえば当然そうなる。  
……なるよね？

飼い主に「待て」って言われて、「よし」って言われた子犬みたいな  
感じだな……。

と、とにかくそんな感じで久しぶりに先輩に会えたのが嬉しかった  
のでこうなっちゃったの仕方ない。

せっかく先輩と一緒に帰れるわけだし。もうちよつと普通に接し  
ないと……！

「なにしてんだ……？」

「あ、えつとー……」

拳を硬く握りしめているところを帰り仕度を済ませた先輩に思い  
切り見られる。

うん、わたしなにやってるんだろ？

「あー、つと……握力、鍛えてます？」

「なんで疑問形なんだよ……」

「そ、そんなことより早く帰りましょ！」

「お、おう。つうか、お前わりと元気じゃない？」

あ、すっかり忘れてた。今のわたし病人だった。

「せ、先輩が待たせるからその間に大分よくなったんです！」

「いや、数分なんだけど？ まあそっか。よくなったんなら一人で帰  
れるな」

そう言つて帰ろうとする先輩の後ろ襟を掴んで止める。

「ぐえっ!? あにすんだよ……」

「先輩、もう暗いです」

「……だな」

「女の子が一人で夜道を歩くのは危ないですよね」

「……だな？」

なんでそこが疑問形なんですか……。

「というわけで、男の人がかよわい女の子を家まで送るのは義務だと  
思うんですよ？」

「おう、じゃあ誰かに頼んでもらえ」

「はい、なので先輩、宜しくお願いします」

今更逃げようとするのを逃すわけもなく、わたしは先輩に向かってペこりとお辞儀をする。

「はあ……。わかったよ。んじゃいくぞ」

「はい」

先輩と一緒にロビーを出て、駐輪場に向かって歩いていく。

「先輩、今も自転車なんですねー？」

「何その自転車馬鹿にした感じ。自転車って素晴らしいだろコスパ最強」

「まあいいですけどー」

先輩と二人乗りできるなら——まあ先輩がそんなことさせてくれるわけではないけど。

「ほら、早く乗れよ」

ええっ!? いいんですか? 高校生のころはどれだけお願いしても乗せてくれなかったのに?

「何してんだ? 乗らないならこのまま帰るけど」

「あ、待ってください! 乗ります乗りますから!」

慌てて後ろの荷台に乗り、えいっと先輩の腰のあたりに手を伸ばしてしっかりと掴まる。

「いや、お前のそれは掴まりすぎじゃね?」

「落ちたら危ないですし? 安全対策ですよ安全対策」

言うど、先輩は照れくさそうに頭をポリポリと掻いて前を向き、ペダルを回し始めた。

先輩との帰り道。

わたしを乗せてるからか、先輩の運転は丁寧でとても安定していた。

こういうところが先輩の優しさなんだろうな、なんて思いながら空を見上げる。

こんなとき都会の夜空はナンセンスだ。

これが少女漫画とかだったら、きっと満天の星が綺麗に輝いてるのになあ……。

「——つしぎ、一色」

「は、はい？」

「何ぼさつとしてんだよ……。俺道わかんねえから道案内頼むぞつて言っただろ」

「あつ、そ、そうでしたね。えっと、突き当たりを左でお願いします」

「あいよ」

どうやらわたしは自分の世界に入っちゃってたみたいで。

せっかく先輩とこうして二人きりなのに、それは勿体ないことこの上ない。

こういう時にすっかりアピールしていかないと……！

「せーんぱい」

「……………なんだよ」

「むーつ。なんでそんな嫌そうな返事なんですか」

先輩のめんどくさそうな態度に思わず顔をむくれてみる。

まあ先輩前向いちやってるし、こんな顔したって意味ないんだけどね

「お前がそんな甘ったるい声で話すときは何かあるからだろ……」

「失礼ですね……。わたしは先輩と会うのも久しぶりなんで、もつと話がしたいなと思っただけです」

「はいはい、さいですか」

先輩はわたしの言葉を軽く流す感じで返事をした。

はあー、なんですかそんなにわたしと話すのはめんどくさいですか。

こうなったら意地でも先輩との会話を終わらせたくなくなるわけで、

「……それで、先輩。何かわたしに聞きたいこととかありませんか?」「特にないぞ?」

普通こういうときって『三年になってからどうだ?』と『好きな奴とかいるか?』

とか『何か悩み事とかあるのか?』とか聞いたりするところじゃないんですかね。

いや、全然先輩は言わなそうですけど。

でも特にないって言われるのもちよつと悔しいので、

「そうですかー? 高校でモテモテの小町ちゃんの学校生活とか、知りたくないんですかねー?」

「教えてくれ今すぐに」

「さすがにその返答の速さはドン引きなんですけど」

はあー。……やっぱりシスコンだなあ先輩は。

ホント小町ちゃんの言うとおりで。でも、そんな小町ちゃんが羨ましかったりするわけだけど。

「やっぱり教えませーん」

「なんでだよ……」

「いや、先輩さすがに必死過ぎますから。あと、危ないんで前向いてください」

小町ちゃんの話題になってからさつきまで前しか向いていなかった先輩がちらちらと後ろを振り返ってくる。これがわたしの話題でなかったら嬉しいんだけど、ちよつと複雑だ。

小町ちゃんは妹だと思ってもやっぱり少しだけ嫉妬してしまう。こんなに先輩に想われてるなんて。

でも、妹になりたいとは思わない。わたしは先輩の隣にいたいから。

「先輩は大学生活とかどうなんですか? やっぱり大学に入っても

ぼっちだったりするんですか?」

小町ちゃんの話はそろそろやめておこうかなと思って話題を変え  
る。

単純に先輩がどんな生活を送ってるのか気になるし。

「やっぱりってなんだよ……。そうだな……。ぼっちだったら楽だった  
んだけどな」

「え、じゃあぼっちじゃないんですか?」

「なんでそんな驚いてんの? まあなんだ、サークルの奴らとかがな  
……」

照れくさそうに頭を掻く先輩。きつと今先輩の顔を見たら照れて  
るに違いない。

でも、そっか。先輩、大学でちゃんと友達で来たんですね。まあ去  
年も最後の方はあの二人以外ともいい感じでしたもんね。

「ふふっ」

「なに……。?」

「いえ、お会いしていない間に先輩も変わったんだなあと思ひまして」  
「三ヶ月かそこらで人なんてそう簡単に変わるかつつうの。俺が変  
わったなんていうのは気のせいだ」

「そうですか? 先輩変わったと思いますよ? 目と性格はあれの  
ままですけど」

「それほぼ変わってないよな」  
「あはっ、バレました?」

なんだろ、こういうのいいなあ。上手く言葉にはできないけど、先  
輩とこうしてくだらない会話をしているだけで幸せなんだと感  
じるわたしがいる。

ホント、この時間がずっと続けばいいのに。

「そういえば、せんぱいのスーツ姿って初めて見ましたけど、意外と似  
合ってるんですね。目元を隠せば普通にかっこいいと思いますよ」

「何それ褒めてるの? 貶してるの? つうか目元隠せて誰だかわ  
かんねえだろそれ」

「たしかにその通りですね。あ、そこ右でお願いします」

わたしの合図で先輩が道をゆつくりと右に曲がる。  
曲がりきって少しいけばそこにはわたしの家で。  
それは先輩とお別れの時間がくるということ。  
それがちよつとだけ悲しくて。  
わたしは先輩を掴む手に少しだけ力を込めた。

\* \* \*

家の前についたので自転車からゆつくりと降りる。

「先輩、今日はありがとうございましたっ」

家まで送ってもらったことはもちろん、わたしの話に付き合ってくれたことに感謝して。

今できるわたしの最高の笑顔先輩に向けた。

「つたく、お前は本当……」

「あざとくないですからね？」

またあざとって思われちゃったかな……？ そんなつもりはなかったんですよ？ 先輩。

「知ってるよ……」

「そう、ですか……」

てつきりそう思ってるのかと思ってたから……その返しはちよつとずるいです。

先輩の顔は暗くてちゃんと見えなかったけど、なんとなく照れてくれている気がして。

今の雰囲気なら、もう少しだけ勇気をだしてもいいんじゃないかと思っただわたしは、

「先輩、手、貸してもらえますか？」

「ん、なんで？」

「いいから、お願いします」

「おい、ちよつ」

手を出し渋る先輩の右手を強引にとる。

先輩の小指とわたしの小指を絡ませて、

「せんぱい、絶対わたしを志望校に合格させてくださいね。もちろんわたしも本気で頑張りますんで」

「……まあ努力はする」

「約束ですよ？　嘘付いたら針千本飲ますですからね？」

「嘘も何も、俺何もいつてないんだが……」

「小さいことは気にしないでください。そんなんじやモテませんよ？」

モテてもらったら困るのはわたしなんだけど。

「はあ。この状況で俺に拒否権……あるはずないんだよなあ」

「よくわかってますね。……それじゃ、指切った、です」

「あいよ……」

こうして先輩と再会した初日。

わたしたちは一つの約束をした――。

「おはよー、いろは」

「あ……おはよう碧」

先輩と再会した日の翌日。

重い身体に鞭打ちながら登校していると、いつものように碧と合流した。

「なに、あんたどうしたの?」

「うん、ちょっとね……」

「凄い顔色悪いけど……」

「全然平気だから、気にしないで」

「言えない……絶対に言えない。」

先輩との再会が嬉しすぎて、お風呂で何時間も今後の妄想をして体調崩したなんて絶対言えない。

特に、横にいる碧には絶対に……。

今は心配そうにしてくれてるけど、こうなった理由を聞いたら絶対からかってくるに決まってるから。

「そういえばさ」

「……どうしたの?」

碧が唇に人差し指を当てながら、何か思い出したように口を開く。

「あんた、比企谷先生と一緒に帰ったじゃない? あのあと何か進展あった?」

「ごほつ!? ごほつ!」

「なになに? やっぱり何か進展あったのおく?」

「ないない、何もなければ! 碧には感謝してるけど、昨日は先輩と一緒に帰れなかったの」

先輩と一緒に帰ったことは秘密にしておかないと……。

「へえー……?」

わたしが答えると、碧は不満そうにこちらをジーツと見つめる。

なになんなの、その顔は……?

「な、なんでしょう……?」



「ん、いやさあ、英語の授業ってね、ちょうど駐輪場が見えるんだ」  
「へ、へえ……」

「でね、昨日窓から外を眺めてたわけ。そしたら比企谷先生の自転車の後ろにあたしのよく知ってる子が乗ってるじゃない?」

「なんで外なんて眺めてるの!? ちゃんと授業受けてよ! いや、わたしが言えたことじゃないけどさ……。昨日だつてせつかくのお試し授業、ほとんど碧とお喋りしちゃってたし。……ちゃんと勉強しなきゃ。」

「そんな現場を目撃しちゃったわけだからさ? 普通気になるつてもんでしょ。その後どうなったか、ね?」

「た、確かにそれは気になるね。誰だろうなその子。先輩と一緒に二人乗りとか。羨ましいなあ……」

「さすがに自分でも苦しい言い訳だつていうのはわかってるけど、今更認めるのもなんか嫌だし、無駄な抵抗を続けてみるわたし。」

「写真もあるよ、ほら」

碧がポケットからスマホを取り出し、こっちに向けてくる。

それを覗くと、待ち受け画像が表示されて、そこには先輩とわたしのツーショットがばっちり写っ——

「なんでこんなの撮ってるの!?!」

「いろはをゆするのにおもうと思つて」

碧はニカッと笑みを浮かべる。なんでこんなに楽しそうなのこの子……。

「というか、ここまでの証拠を見せつけられたらもう言い逃れなんて出来る訳もないわけで。」

「無駄な抵抗は諦め、わたしは一つ、碧にお願いすることにした——。」

「碧……」

「なに? あらたまっちゃつて」

「お願いがあるんだけどさ、いい?」

「まああたしが聞ける範囲ならいいけど……」

「その写メ頂戴!」

「へっ……? ……いいけど」

「やった、ありがと、碧！」  
すぐさま碧に送るように頼む。

アプリを開くと、碧から画像が送られてきたので、素早く保存。  
ふふっ。遠目だけど意外とちゃんと撮れてるし、わたしの待ち受けにしちやおつと。

あ、でも先輩に万が一見られたらまずい、よね？ ……でも、先輩がわたしの携帯見たりしないかー。

少し悩んだけど、結局先輩とのツーショット画像を待受にすることにした。

心なしか体調も少し良くなった気がする。先輩効果かな……？

「それにしても、お願いっていうから、あたしは別のことだと思ってたよ」

「んーなんでー?」

画像を眺めるのに夢中になっていたわたしは碧の言葉に生返事をする。

「てつきり、『このことは秘密にして!』とか言うのかと思ってたからさー」

確かに、それはそれで大事なことだ。言いふらされても良いことないし。碧が言いふらすとは思えないけど……? うん、やっぱり最後はどうしても疑問形になっちゃうな。

「……言いふらさないでね?」

「疑われてるなああたし。その辺は安心して大丈夫だから」

そうだよ、碧はそんなことしないよね! 疑ったりしてごめんね。

「言いふらす前に結構な人知ってるからさ」

「なんでええええ!?!」

ちよつと待って? なんで? なんでそんなことになってるの? 意味わかんないんですけど?

「や、だってあんたあそこ塾の前だよ? 普通に他の人に見られてるって。三崎さんも見てたし」

「三崎って……」

あの子か……。

あの子にも見られてたのはちよつとめんどくさいことになりそうだなあ……。

「あの子、比企谷先生帰る時間は大体外見てるからね。それで目撃したんでしょ。ちなみに他の女の子にもバッチリ伝えてたよ」

碧はそう言い放って、親指をグツと突き出した拳をこつちに向け  
る。

グツじゃないよグツじゃ……どうするのこれ。先輩にも思いつき  
り迷惑駆けつちやつてるじゃん……。

「先輩、辞めさせられたりしないかな……」

「んー大丈夫じゃない？」

「なんでそんな軽いの……」

こういうのって、生徒と講師が肉体関係を持つてるとか言われてク  
ビにさせられたりするんじゃない……。肉体関係なんて持つてないんだ  
けどね……？

ああ……せつかく体調良くなつたかなと思つたけど、また頭痛く  
なつてきた……。

「あの人はほら経営者の人のお気に入りだし。別にいろはだつて送つ  
てもらつただけなんですよ？」

「経営者のお気に入りって……それだけで済む問題なのかなあ」

「大丈夫大丈夫。気にしすぎなのよいろはは」

「そうなのかなあ……」

「あ、でも三崎さんには気をつけたほうがいいかも？」

「あー……」

碧の言いたいことはなんとなくわかる。初日の段階であんなに敵  
視されてたし。

「完全にいろはをライバル視してるねあれは」

「だよねえ。……まあ負ける気はさらさらないけど」

「お、いいですねえ」

こつちは二年前から片思いしてるんだから……。

そんな簡単に譲ったりしない。

それにわたしのライバルはあの二人だけだから。

「ま、これからどうなるか、楽しみかなっ」

「人ごとだなあ」

お互いを見て、くすくすと笑い合う。

「で、いろははいつから通うの？」

「そうだなあ、たぶん来週の月曜かな」

「そっかそっか、これからが楽しみだね」

楽しみの意味がすつごく気になるんですけど？ 絶対わたしと三

崎さんで楽しむつもりでしょ。

まったく碧は……。

でもまあ……なんだかんだわたしも、これからが楽しみで仕方ないから不本意ながら碧の言葉に同意するでしょう。

「くしゅんっ——」

どうやら本格的に風邪を引いてしまったみたいだ。

碧と一緒に登校したあと具合が悪くなったわたしは、強制的に保健室に連れてこられて養生しているわけで。

「どう、一色さん？ あんまり悪いようだったら早退する？」

カーテンを捲って養護教員の先生が様子を声をかけてくる。

「いえ、もう少しだけ休めば大丈夫だと思っ……」

「そう、それならゆっくり休んでね。私はちよつと用事があるから少し席を外すわね」

「わかりました」

「それじゃあね」

カーテンが再び閉じられて、カラカラと扉を開閉する音が聞こえる。

「はぁ……」

一人になった保健室で自然とため息が溢れる。

携帯を取り出して時間確認すると、時刻は十二時を過ぎていて、もうお昼休みの時間だ。

午前中の授業をまるまる休んだことになるなあ。

ホント何やってんだろわたし。

受験生だっていうのに体調管理もダメダメで。

先輩に再会したからって浮かれすぎちゃったなあ……。

自分の情けなさが嫌になってへこんでいると、コンコンと扉をノックする音が聞こえて、

「失礼します」

聞き覚えのある声が室内に響く。

とたとたと歩く音、段々とこちらに近づいて、カーテンの隙間からひよっこり顔を出したのは先輩の愛妹、小町ちゃんだった。

「あ、いろはさん！ お身体大丈夫ですか？」

「うん、大分良くなったかな。小町ちゃんはどうしてここに？」

「平塚先生から、いろはさんが体調崩して休んでるって聞いたんですよ」

「あーそっかあ……」

「そういえば今日の三時間目は現文だったっけ……」

平塚先生のことだから小町ちゃんに様子を見てくるようにでも言っただろうなあ。

「いろはさん、お昼まだですよね?」

「うん。今日は来てすぐにここに来ちやっただからね」

「だと思つて小町、調理室でおかゆを作ってきました! 名づけて小町特製スペシャルおかゆです!」

「え、ホントに?! 小町ちゃん、ありがとうー」

「いえいえ、いろはさんには日頃お世話になってますからね、これくらい当然ですよ」

ホント小町ちゃんは良い子だなあ……。

先輩と結婚したりしたらこの子が義妹になるのかあ。

想像すると、なんとなくさつきまで沈んでた気分が明るくなってきて――

「いろはさん、もしかしてお兄ちゃんのことでも考えてます?」

「へ? な、ななななにいつてるの小町ちゃん? せ、先輩のことなんてなにも考えたりしてないよ? ホントに全然!」

「いやあ、恋する乙女は可愛いですなあ」

「ホントに違うってば……!」

「ちなみにどんなこと想像してたんですか? 新生活とか?」

「違うからね? ただ、先輩と結婚したら、小町ちゃんが義妹になるんだなあ、なんて――」

……あ……。

あああああああああああ!?

「ほうほう……いろはさん、そんなことを考えてたんですね」

何言っちゃってるのわたしは……。もうやだ、穴があったら入りたい。一生穴に籠ってたい。殺して、誰かわたしを殺して!

「冗談はさておき、小町もいろはさんが義姉ちゃんになるのは大歓迎

なのです」

「……え？ ホントに？」

「ホントですとも。でも、いろはさんだけじゃないですけどね？ 雪乃さんと結衣さんが義姉ちゃんになるのも小町は大歓迎です！」

ああ……なんだそういうことか……。

まあでもそうだよ。小町ちゃんはわたしより雪乃先輩や結衣先輩の方が付き合い長いわけだし。そんな中、わたしのこと大歓迎で言ってくれるだけ感謝しなきゃ。

「ありがと、小町ちゃん」

「いえいえ。さき、おかゆ、冷めないうちに食べちゃいましょ！」

「だね、いただきます」

再び、小町ちゃんの作ってくれたおかゆを口にする。

うん、やっぱり美味しい。

ただ、あれだなあ。小町ちゃんがこれだけ料理が上手だと、先輩をわたしの手料理でどうこうするのは厳しいかなあ。あ、でも、小町ちゃんに先輩の好みの料理を聞いて、それを先輩に食べてもらえば……？

「いろはさん、どうしました？ お口に合いませんでした？」

「ううん、そんなことないよ！ すっごく美味しい」

「あ、もしかして、またお兄ちゃんのこと考えてました？」

「ち、違うよ!？」

「本当ですかー？ お兄ちゃんの好きな料理とか知りたいと思ったりしてませんか？」

うぐっ……。

小町ちゃん鋭すぎでしょ……。

「……そうです。先輩の好みの料理とか教えてもらいたいと思ってました」

観念して答える。この子には見破られてるような気がしたし……。

「そうですかそうですか、それなら小町がお兄ちゃんの好きな料理をいろはさんに教えてあげますよ！」

「え、ほんとに?! いいの?」

「もちろんですよ、それくらいなら全然オーケーです！　ですので、早くお身体良くなつてくださいね？」

「うん、わかった。じゃあ良くなつたら宜しくね！」

「はいです！　それでは小町はそろそろ教室に戻るので、おかゆ食べ終わったら置いておいてください。後で小町が取りに来るので」

そう言つて、小町ちゃんは保健室をあとにした。

\* \* \*

「ふー。お腹一杯になつたなあ」

おかゆを食べ終え、一息つく。

心なしか大分気分が良くなつた気がする。

おかゆ効果つてすごい……！

置かれていた体温計を手にとって熱を測つてみる。

「三十六度……か」

うん、熱もないみたいだ。

これなら途中からだけど授業に参加できるかな。

わたしはベッドから出て上履きを履き、教室に向かった――。



小町ちゃんと約束した週末の土曜日。

小町ちゃんからのお誘いで、わたしは先輩の家を訪れることになった。

「今日も暑いなあ……」

七月も終わりに近づき、それに伴って気温がどんどん高くなってる気がして。

胸元をばたばたとさせながら服の中に風を送る。

……今度先輩の前でこれやってみよっかな。

なんてくだらないことを考えつつ、今日の予定にわくわくしながら歩いていく。

小町ちゃんに教えてもらった住所のとおり歩いていくと、目的地である先輩の家にたどり着くことができた。

今日は気温が高いということもあり、いつもよりも肌を露出させた服装をしていて。

わたしの服装を見る先輩の反応を想像しながら玄関のインターホンを鳴らす。

「はいはい！ あ、いろはさん、いらっしやいです！」

扉が開かれ小町ちゃんが顔を出すと、わたしを見て、いつも通りの元気な笑顔で出迎えてくれる。

後輩の笑顔に癒されながら、挨拶を返す。

「こんにちは、小町ちゃん。今日はその、先輩は……？」

「ああ、お兄ちゃんなら今日も塾のバイトですよ。お兄ちゃんに会いたかったですか？」

「なっ、ぜ、全然？ そんなことないよ？ だってほら、先輩いたら料理教えてもらえないし！ だから、いない方が助かるっていうか、なんていうか……」

「つまり会いたかったんですね！」

「……はい」

「いろはさん、乙女ですなあー」

うう……だって、せつかく先輩の家に来たわけだし、そう思っちゃうのは仕方ないというかなんと言いますか……。

はあ、とため息をついて肩を落とす。

まあ今日の目的は小町ちゃんに先輩の好みを教えてもらうことだし、先輩に会えないのは我慢しよう……。

それから家の中に入り、小町ちゃんに案内されリビングに向かうと、女性がソファで新聞を読んでいた。

この人が先輩と小町ちゃんのお母さん……。

小町ちゃん綺麗系にして大人にさせた感じの女性は、わたしを見ると、

「あら、いらっしやい」

「あ、お邪魔します！ えつと、小町ちゃんと同じ学校の一色いろはです。小町ちゃんにはいつもお世話になってます」

「あなたが一色さんね。話は小町から聞いてるから。今日はゆっくりしていきなさい」

「は、はい。ありがとうございます」

ぺこっとお辞儀して顔をあげると、お義母さんはこちらをじーっと見えて、

「ねえねえ、いろはちゃん。バカ息子のどこがいいの？」

……えつ？

んんん、あれ？ いまこの人はなんて言ったの？ ごめんなさい全然何言ってるのか聞こえなかったんで答えられません！

というか、バカ息子って……先輩家でもそんな扱いなんですか。ちよつとだけ同情します。

「えつと……う？」

「あれ？ いろはちゃん、うちのバカ息子のことが好きなのよね？」

うん、今度はしつかり聞こえた。さつきもバツチリ聞こえてたけど。

ってそんなことは実際問題なくて。……なんでお義母さんがそのことを知ってるんですか？

まったく状況が読み込めなくて——助けを求めるように小町ちゃ

んを見ると――。

ぺろつと舌出しながらごめんなさいというような仕草をしていて。

小町ちゃあぁん！

辛い。好きな人のお義母さんにバレちゃうのってホント辛い……。

「えつと、はい……。そうです……」

「それで、どんなところが好きなの？ 良かったら教えてくれないかな？」

「えーつと……」

良かったらついても、こんな状況じゃそれは半ば強制的なものじゃないですかお義母さん！

……でもどこがいいか、か。どこがいいんだろうなあ……。

「……どんなところといますか。……ただ、先輩と一緒にいたい、先輩の隣で一緒に時間を共有したいというか……」

「つまり結婚したいってことね」

「いやいやいやいや、そ、そういうんじゃないんですけど、まだ！」

「まだっていうことはいつかは結婚したいってことね！」

「それは……うう……」

お義母さんにグイグイと迫られて、わたしのライフはもうゼロです。

小町ちゃん助けて……。

この場をなんとか切り抜けたらと思って、小町ちゃんを継るように見つめる。

すると、小町ちゃんが、

「お母さんお母さん、いろはさん困ってるから。そのへんにしなよ」

ぽんぽんと後ろから肩を叩きつつ、お義母さんをなだめる。

お義母さんも、「少しやりすぎちゃったかしら？」と言って、これ以上追求するのをやめてくれた。

ふう、助かったよ、小町ちゃん……。

ホント、小町ちゃんには感謝しなきゃだ。……あれ？ でもお義母さんがそのことを知ってるのは小町ちゃんのせいなわけで、つまり原因が小町ちゃんなんだから感謝っていうよりは……。

うん、後で小町ちゃんにはお仕置きしなきや。  
わたしは固く決心した――。

\* \* \*

それから小町ちゃんに先輩の好みの料理をいろいろと教わった。  
窓から外を見ると、夕日が沈んできていて、

「あ、もういい時間だね。小町ちゃん今日はありがとう」

「あれ？ もう帰っちゃうんですか？」

「うん、もう暗くなっちゃうしね」

「夕飯一緒に食べたらいいのに」

わたしが帰ろうとすると、ソファアークでくつろいでいたお義母さんが  
声をかける。

「ご迷惑じゃないですか？」

「そんなことないわよ？ ね、小町」

「小町も全然オーケーなのです！」

「えっと、それじゃお言葉に甘えまして……？」

「じゃ、決まりね。私はこれからお父さんと実家の方に用事あるから  
帰りは明日になるけど、小町、あとはよろしくね」

「はい」

え？ お義母さんは出かけるんだ。……あ、そつか。それで小町  
ちゃん一人になっちゃうから……。

「それじゃいろはさん、夕飯の準備しましょうか！」

「うん」

小町ちゃんとキッチンに並び夕食の準備に取り掛かる。

材料を取り出して準備をしていると、

「じゃあ私はいくから」

出かける仕度を済ませたお義母さんがキッチンに顔を出す。

そしてわたしたちにそう言うと、玄関の方に向かっていた。

お義母さんが向かったあと、わたしも追いかけるように玄関に向  
かって、

「あの、今日はありがとうございました」

「いーのいーの、また遊びに来て頂戴ね。小町も喜ぶから」

「はい！」

「それじゃ、今日は頑張ってね」

「はい！……頑張って？」

何を頑張るんだろう？　なんて疑問に思っていると、お義母さんはすでに家を出ていて。

結局その意味がわからないままわたしは小町ちゃんの待つキッチンに向かった。

キッチンに戻ると、小町ちゃんが既に料理を始めていて、

「あ、いろはさん、先始めちゃってました」

「ごめんね、わたしもすぐ手伝うから!」

小町ちゃんの隣に立って、二人での共同作業。

下準備をわたしが済ませ二人で調理する。

それから小町ちゃんが今日教えてくれたことを復習しつつ味付けを整えていって。

完成した唐揚げを盛り付け、練習中に教えてもらって作ったお味噌汁を温めてよそう。

「できたー」

「いろはさん、すごいですよ! もうバッチリじゃないですか!」

「一応は料理得意を自負してるからねっ」

「これならお兄ちゃんのハートを射抜くのもあとわずかですね!」

「そ、そうかなあ……?」

「そうですそうです。あ、じゃあテーブルに運んじやいましょう!」

小町ちゃんの言葉に頷き、唐揚げ、お味噌汁。そして小町ちゃんが作ってくれたサラダをテーブルに運ぶ。

炊飯器から炊きたてのご飯をよそい、これで本日の夕食の完成っ。

うん、見た目も色鮮やかな感じで申し分なしかな。ここに先輩がないのが残念なくらい。

「さ、食べよっか」

「そーですね。あ、ちよっと小町部屋に用があるので行ってきます!」

「う、うん?」

ぱたぱたと駆け足でリビングを出て行く小町ちゃん。

急に用ってどうしたんだろう……?」

とりあえずと、席について待つことに。

携帯を弄りながら待つこと数分、階段を降りる音が聞こえて、小町ちゃんが戻ってくる。

少し大きめのバッグを持って、まるでこれからどこかにお泊りにい

くような……。

「いろはさん、申し訳ないんですけど小町、急に友達にお呼ばれしちやいまして！ いやあ本当に申し訳ないです！」

「え、え？ ご飯はどうするの？」

テーブルの上には二人分の料理が並んでいて。

さすがに料理を食べてから行くんだよね？

せっかく作ったのにもったいないし……。

「ご飯をいろはさんと一緒に食べたいのは山々なのですが、早く来いとうるさくて……。なので、ご飯食べてる暇がないんですよ」

「ええ……。それならこの料理どうするの？ それに、小町ちゃんが出かけるならわたしも帰らないと」

家の人が誰もいないのにわたしだけいるわけにもいかないし……。

この場合、料理はもう仕方ないし、今日は帰ろうかな。

と、その時、玄関のドアが開く音がして――

「ただいまー」

声に反応して身体がビクツとなる。

せ、先輩が帰ってきたんだ……。

どうしようどうしよう……。あれ？ 別にわたしがあせることはない……。よね？ 別にわたしがあせること

「小町、急いで帰ってこいってなんかあったの……か？」

リビングでわたわたししているわたしと、先輩の目が合って……。

「お、お邪魔してまーす……」

「……何してんだお前」

なんですか後輩に合って第一声がそれですか！ 少しぐらいこう『お、一色じゃん。なんだ、俺に会いに来たのか？』とかそういうのな

いんですかね。……いやこれ、先輩が言ったら気持ち悪いかな。というかこんなこという人ウザイだけだ。戸部先輩みただし。あ、でも戸部先輩にしてはキザすぎるかな……。

と、とにかく今は、えつとえつと――

「会って一言目がそれってひどくないですか？」

うん、これでいい。いつも通りいつも通り。

変なこと言って意識してるのバレちゃったらダメだもんね！

「や、俺は単純に疑問を投げかけただけなんがだ……」

「小町がいろはさんを誘ったんだよ」

「小町が？」

「そ、そうです！ それで今日は小町ちゃんと遊んでたんですよ！」

「……お前、遊んでる暇あるわけ？ 受験生でしように」

くっ……。痛いところついてきますね先輩……。

「きよ、今日は息抜きです。受験生にだって息抜きは必要じゃないですか」

「まあそれはそうだが……」

「二人で盛り上がっていると悪いんだけど、小町そろそろ行くから！ あとは若いもの同士でよろしくしてくださいっ！」

「えっ!？」

小町ちゃん今なんて？

わたしと先輩が二人で……？

頭がごちゃごちゃになってるうちに、小町ちゃんは玄関を飛び出して行ってしまった。……これはえっと、どうしたらいいんですかね……？

「えっと……、先輩、とりあえずおかえりなさいです……」

「まったく状況が掴めないんだけど……とりあえずただいま……なのか？」

「ご飯にします？ それともお風呂？ それとも……わ、わたしです

か……？」

「何言ってるんだお前……」

うう……。ホントに何言ってるのわたし。テンパりすぎでしょ……。

「冗談です冗談！ って先輩顔赤いじゃないですか！ なんですかもしかして照れちゃったんですかすみませんこういうのはさすがに同棲とかしてからじゃないと無理です！」

「だからなんで何も言っていないのに振られちゃうわけ……？」



「せ、先輩のせいです！」

「意味がまったくわかんないんだけど……。まあいいわ……。とりあえずそれはとりあえず置いておくとして、お前これからどうするんだ？」

「と、言いますと？」

「これからとは？ わたしの今後のことについて？ それともわたしたちの将来について？」

「や、小町はどっかにいっちゃったし……。帰るなら送っていくけど」  
「そうですね、そう言う意味じゃないですよ。わかってましたよ？ ちよつとふざけてみただけですから！」

「あー、あの、ご飯作ったのでそれを食べてからでもいいですか？」

「飯？ 誰が作ったんだ？」

「わたしです。まあ小町ちゃんと一緒にですけど……。二人で食べるつもりだったんですけど、小町ちゃんが急に出かけるって言い出して、一人分余っちゃってるんですよ」

説明しながらテーブルの方を見る。

準備してからまだ時間はたっていないので料理からは湯気が立っている。

「どうです、先輩？」

「そうだな……。俺も腹減ったし、食べるか」

「はい」

二人とも席について、いただきますをする。

箸を取り唐揚げを一口に運ぶ。

その様子を眺めながら、

「ど、どうですか……？」

「うん、美味しい。この味、結構好きだぞ」

「ほ、ホントですか!？」

「やったああ！ 小町ちゃんにいろいろと教わった甲斐があったよあああ！」

小町ちゃんホントありがとう……！

うう……。それにしても、好きな人に自分の手料理を褒めてもらう

のってこんなにも嬉しいことなんだ……。

「おかわりありますからね！ どんどん食べてくださいね、先輩！」

それから先輩と一緒にご飯を食べて、帰りは送ってもらった。

さすがに遅くなりすぎたから、最寄りの駅までだったけど。

それでも今日は、ここ最近の休日では一番充実したと思う。

今日みたいな日をこれからも過ごすために……ちゃんと努力しなくちゃね。

「おっはよー!」

「おはよ、あんたにしては珍しく元気じゃない」

いつもならあたしが後ろからこの子の肩をぽんと叩き挨拶するところだけど、今日は珍しく逆パターン。

というか、普段朝あまり強くないいろはが登校中にこれだけ元気つていうのは……何かあるね。

「いろは、休日にかいことあった?」

「え……う。なななな、何が? 何も無いよ何も! ホント全然!」

あたしの問いに歩いてきた足を止め、あたふたとするいろは。何この子、ペットにしたい。

最初の間はなんなんですかねえ? それにその焦りっぷり。十中八九なにか隠してるに違いないわけで。

だとしたら何を隠してるのかなあいろはちゃん? むむ……。あつ——。

「比企谷先生」

と、その名前を出したとたん、いろはの動きがピタツと止まる。

ははあん、なるほど……比企谷先生と何かあったってわけね……。

まったく……受験生で志望校危ないっていうのに呑気だなあ。

でも、まあ元気なくて落ち込んでたりするよりはマシか。

「せ、先輩がどうしたの?」

何故か必死に隠そうとしてるいろはちゃん。

仕草やらなにやらで明るい理由がバレバレなんだけど、これはこれでからかい甲斐があるというかなんというか。

端的に言つて、めっちゃくちゃ面白いわけでありまして!

学校じゃ人前であまり素を出さないいろはが、こうも動揺してるのを見るのはこの子には悪いけど、ふふっ。

少しばかりからかつてみよう。なんて考えて、

「そう言えば、昨日の夜、比企谷先生に会ったんだけどねー?」

「うそっ!?! ど、どこで?」

おお、食いつく食いつく。この子、比企谷先生を餌にすれば簡単に操れてしまうのでは？ いろは狙いの男どもには知られちゃいけない事実ね……。

「ららぽでね。一人でいたから声かけてみたんだけど」

「……あ、そう」

あれあれ？ なんで急にこの子テンション低くなったの？

あたし何か変なこと言った？

「碧」

「はい、なんででしょう」

「なんでそんな嘘ついたのかな？」

「嘘って？ 本当に会ったけど……？」

なぜバレたの？ この子、まさか人の心が読める……!?! いや、人の心読める子があそこまで動揺するわけあるか！

「いい、碧。先輩が、休日に、買い物、まして、ららぽなんか一人で行くはずがないんだよ？ あの人がどれだけめんどくさがりで、人混みが嫌いだか知ってる？ わたしなんて、前に一回デートしたただけで――」

「ストップ！ はい、タイム！ まって、ちよつと待ってね」

「……何？」

なるほど、比企谷先生ってそういう人だったのね。というか好きな相手にこの子いろいろと言い過ぎでしょう……っていうのは今は置いていて、えーっと、今この子はなんて言った？ 前に一回デート？

何？ 実はそんなに進んでたの？ どういうことなのかな？ いろはちゃん。

「今、あんた前に一回デートしたって言ったわよね？」

「……言ってるじゃない」

「言った」

「言ってるじゃない」

ほう、そうきますか。オーケー、ならば戦争ね。

「じゃあ比企谷先生に聞いてみるでもいいよね？」

「それは絶対にダメ」

「じゃあどういう経緯でデートしたか教えてもらおうじゃない。そしてそれを今まで黙っていた理由も」

今や学校中のアイドル的存在のいろは。だけどいろはに恋愛方面でそういう噂はまったくいいほどなくて。

まあその理由は今ならわかるんだけど。比企谷先生のが好きすぎて、他の男子に全く興味がなかったからってね。あんたは少女漫画に出てくる乙女か。

「そ、それは、なんていうか。いろいろあってといいますが……、無理矢理付き合ってもらったというか……そんな感じなんだけど」

「無理矢理……?」

「うん……。だって普通に誘っても先輩絶対デートなんてしてくれないし。いろいろと理由つけてしてもらったの」

比企谷先生ってそんなにハードル高いのね……。うちの高校に通ってる男子なんかいろはに誘われたらホイホイついていきそうなのに……。

「もう、この話はおしまい!」

「えーなんでしょー。もつといろいろ聞きたかったのに」

「ダメ、言わないから。碧絶対言いふらすし」

あんたの中であたしとただ口軽いのよ。親友を信じられないっていうの?」

いや、確かに、言っちゃうかもしれないけど……?」

「仕方ない、今日のところはこれくらいで引き下がってあげよう」

「なにそのモブキャラっぽい台詞は……」

「そういうこと言うと、週末何があったかまで聞いちやうよ?」

「ごめんなさい、なんでもありません」

「ただ聞かれたくないのよあんた。」

「まあいつか聞かせてもらおうけどね?」

「それじゃ、行こっか。大分話し込んだりしたし」

「だね、大体碧のせいだけどね?」

「あーはいはい、あたしのせいでいいですよっつと」

いろはと顔を見合わせて、くすくすと笑い合う。

最近受験の悩みでいろいろと元気がなかったみたいだけど、比企谷先生と再会してからは明るいろいろはに戻ってくれて何よりだ。

これは比企谷先生に感謝しなくちゃね。

「あ、そうそう」

「ん、なあに？」

歩き出して数分がたち、いろはが何か思い出したのか口を開く。

「わたし、今日から塾に通うから。よろしくね、碧」

「そっか、じゃあ書類とか全部終わったんだね」

「うん、今日受付済ませたら完了。今日から必死に頑張るから」

「憧れの比企谷先生のために？」

「う・る・さ・い！」

からかうと、頬を桃色に染めながら必死になるいろはが可愛くて。

ああ、この子の恋が成就するといいなあと。

あたしもできるだけこの子の力になってあげよう、そんな気持ちになっただ。

「それじゃいこっか」

「うん」

放課後になり、予定通り碧と塾に向かう。

先輩に会える。実際には一昨日会ったばかりだけど……それでもやっぱり先輩に会えるのは嬉しくて。

自然と歩くペースが速くなって、いつの間にか碧がわたしのあとについてくる形になっている。

「いろは、比企谷先生に早く会いたいののはわかるけど、もう少しゆっくり歩こうよ」

「な、何言ってるの!?! わたしはただ、早めについて書類とかいろいろ済ませたいだけだから!」

「あーはいはい、照れてるいろは可愛いぞうっ」

「もうーっ!」

「あははっ」

調子狂うなあ……。なんでこんなに動揺しちゃうんだろわたし。

それもこれも先輩が悪いんだ。……さすがにこれは理不尽すぎるよね。というか碧がからかってくるのが悪い。全部碧のせい!

「もう知りません。わたしは先に行きます。じゃあね」

「あ、ちよつと待ってよいろは!」

たたたつという足音が聞こえ、碧が横に並ぶ。

ふんっ、何も見えないし何も聞こえないもん。

「怒っちゃった? ごめんてばー」

「……………」

「ねー? いろはさーん」

「……………」

歩きながら両手を合わせて謝罪をする碧をスルー。

無視無視。碧は少し反省して?

「今度、お勧めのケーキ屋で奢るから、ね?」

「……………」

つい返事をしちやっただけど、これは、うん。なんていうか、碧から美味しいケーキ屋さんの情報を得ることで、いつか来る先輩とのデートに利用するためというか。別に、ケーキが好きで反射的に反応してしまったわけじゃないから。

「ほら、最近できた駅前の。あそこのモンブランがすごい美味しくてね。いろはにも食べて欲しいなー。許してくれるなら奢っちゃうんだけどなー」

「……許す」

碧があまりにも必死に謝るので今日のところはこれくらいで許してあげることにした。

さすがにこれ以上無視し続けるのは可哀想だし？ わたしもそこまで鬼じゃないから。

決してモンブランに釣られたわけじゃないし。

例えモンブランに釣られたんだとしても、それはわたしが試食しておくことで、本当に美味しければ先輩攻略時に役に立つ可能性があるからで。ほら、先輩って甘いもの好きだし。

「いろは、やつさしー！ ……ちよろいな」

「でしょ、そうでしょう。最後なにか言った？」

「ううん、なにも。気にしないで」

「そう……？」

ボソツとなにか言われた気がしたんだけど……。気のせいなのかな。

「そうそう、疲れてるんだよいろは。まったり向かおう？」

「う、うん……」

碧に肩を掴まれて、強制的に歩くスピードを緩められる。

にしても、なんでこんなに碧は楽しそうなんだろ……？

そんな疑問を抱きつつ、わたしたちはゆっくり塾へと向かった。

\* \* \*

序盤歩くペースが早かったおかげか、予定よりも早く塾につくこと



ができた。

一旦碧と別れ、受付で入会の手続きを済ませる。

これでわたしも今日から正式にこの塾の一員なわけで。本格的に勉強を頑張つて必ず先輩と同じ大学に……！

「ねえ、あなた」

「はいっ？」

心の中で気合を入れていると、後ろから声をかけられる。

碧と先輩以外、ここには知り合いがないのでまさか声をかけられるとは思ってなくて、素っ頓狂な返しをしちやつた気がする。

振り返つて声の主を見ると、この前わたしを睨んできたえつと、誰だっけ？ ……ああそうそう三崎さん？ たぶん、そんな名前だったような気がする。

……なんの用だろう？ まさか、初日から因縁付けてきて追い返そうとか……？ 残念、わたしそういうの慣れっこなんでー、女子高生一人ごとき、軽くあしらっちゃいますよつと。

こういうの慣れっこつてなんか嫌だな……自分で言つてて悲しくなつてきちやつただけだ。

けど、三崎さんはわたしが振り返つてもそれ以降何も言わなくて、わたしの方が我慢できずに口を開く。

「えつと……なんですか？」

「……話、あるんだけど」

「それは、どういう……？」

「いいから、ちよつと来て」

「え、えつ……？」

状況が読めずに困惑していると、三崎さんがわたしの腕をとつて塾の外にでる。

いや、待つて本当なに……？ 次は先輩の授業なんだから早く済ませたいんですけど。

「あなた、比企谷先生のこと好きなの？」

おつと。これはまたド直球な質問ですね。

わたしを無理矢理駐輪場まで連れてきた三崎さんは、いきなりドス

トレートの質問をぶつけてきて。

「えつと……好きっていうのは、likeですか？ loveですか？」

「そ、そんなの決まってるでしょ！ ら、らぶ、のほうよ！」

「そうですね……loveですね。間違いなく」

「——っ!? わ、私だって、比企谷先生のこと好きなんだから！」

それはなんとなくというか、初見で大体わかってましたけど……。

「で、話はそれだけですか？ もうすぐ授業ありますし、もう戻りたいんですけど……」

「ま、まだ終わってないから！ いきなり来たあなたなんか、私、負けないから！」

「はあ……」

いきなりって……、こつちからすればあなたの方がぼつとでなんですけど……。

わたしがどれだけ先輩のことを好きなのか。

一度教えてあげなくちゃならないみたいだ。

ただ……、こう面と向かって宣戦布告的なことをされるのは不思議と悪い気分はしなくて。

それはきつと、別に好きでもない男に好かれたりした時に、影でこそこそ言われたりするより全然辛くなくて。

わたしもこの子みたいに、あの二人に正面から宣戦布告できたら楽しかったんだろうな、と思うから。

「いいですよ、わたしもあなたに負けるつもりはありません。正々堂々勝負しましょう」

まずはこの子に正面から打ち勝つことにした。

「ま、負けないから!」

「わたしもあなたには負けませんよ」

あなたには。

じゃああの二人には……?」

ううん、今はそんなこと関係ない。

だって——

「なんだ、お前ら? 試験か何かで勝負でもするのか?」

「せ、先輩!」

「せ、先生!」

噂をすればなんとやら——ここが駐輪場だったっていうことを忘れていた。

ちよつと考えれば、ここでこんな話をするのは危険だったってことくらいわかるのに。

わたしも三崎さん相手に少し冷静さを欠いていたんだ。

もしかして、今の話聞かれちゃった……?」

で、でも、もし聞いてたなら、先輩はわたしたちに話かけることなんてしないはずだし。

横目で三崎さんを見ると、明らかに動揺していて。

ここは、わたしが上手く誤魔化すしか……!」

「そ、そうなんですよー。三崎さんと次の模試で勝負しよっかって話しててー。ね、三崎さん?」

くっ……今のわたしにはこれが限界……。

あとは三崎さん、なんとか話を合わせてくださいお願いしますっ。

「そ、そうです。模試で勝負して、えつと……勝った方が負けた方の言うことを一つ聞くみたいなの?」

え、待って三崎さん? それわたし聞いてないんだけどなー?

なんでそんなルール追加しちやっただのかな?

「なんで、疑問系なんだ? ……まあいい。もうすぐ授業始めるから、教室行つといた方がいいぞ」

「それ先輩が言っちゃいます？ 今来るとか遅くないですか？」

「……大学生は忙しいんだよ」

「へえーそうなんですかあ」

なんとか誤魔化せたと一安心。

「あ、あのー！」

普段通りの対応をしていると、突然、三崎さんが大きな声をあげて、

「ひ、比企谷先生。今週の日曜日って空いてませんか……？」

「へ……？」

三崎さんの誘いに先輩は素っ頓狂な反応を見せる。

たぶん、わたしも同じような反応をしていると思う。

まさか三崎さんがここで勝負に来るなんて思ってもなかったから。

出遅れたわたしは、その場を見守るしかできなくて。

三崎さんは、子羊のように震えながら、だけど目はとても真剣で、

「も、もしよかったらなんですけど……、勉強を教わりたいなと思って

……」

「あー……、そういうことか……。でもなあ、三崎と一色は勝負してるわけだろ？ それってフェアじゃないんじゃないか？」

「そ、それは……」

先輩の言葉に言い淀む三崎さん。

確かに、勝負するって話をしたあとでこれは先輩も承諾しにくいよね。

あれ？ でもそれってわたしにも言えることになっちゃうのか

……それはまずいですよ！

「え、えっと先輩」

「ん？」

「一日くらい先輩が三崎さんの勉強に付き合っただけでも、わたしは構いませんよ？」

「そうなのか？」

「はい。その代わり、わたしも来週辺りお願いしますけど」

「えー……」

ちよつと、そこまで嫌そうな顔することないじゃないですか！

「後輩に対して冷たすぎじゃないですかねー……」

「や、高校時代のことを考えれば当然の反応だろ」

「そこまでわたしひどかったですか?」

「自分の胸に聞いてみる」

んー………………。うん。結構な頻度で先輩に苦勞かけてたかな。反省します。

「でも、あれだ……。まあ勉強したいってことは悪いことじゃないしな。二人ともそれでいいなら見てやるよ」

「ホントですか!?!」

「お、おう」

三崎さんとわたしがぐいっと詰め寄り、若干引き気味になる先輩。

女子高生二人に詰め寄られてこんな反応するのは先輩くらいじゃないかな?　なんて思いながら、わたしは更に追い討ちをかけるように、

「先輩のそういうところ、わたし好きですよ」

冗談ぽさを含みながら満面の笑みでわたしの本心を伝えた。

これは三崎さんへの威嚇も兼ねてだけ……。。

まあどうせ、この状況であれこれ言ったところで先輩は真にうけないだろうし、これくらいはね?

「わ、私もその……先生のそういうところす、好きです……」

ここはわたしの勝ちかな、という予想とは裏腹に、三崎さんも対抗してくる。

顔を真っ赤にして照れている三崎さんは、女の子のわたしから見てもかなりの破壊力。

むー。もう少しわたしも攻めればよかったかな。

「お前ら急にどうしたの?　煽てても何も出ないぞ。俺今月金欠だからな」

こんな可愛い生徒二人に好意を向けられていても、やっぱり先輩は先輩で。

ていうかバイトしてて金欠ってどういうことですか?　もしかして誰かに貢いでる?　いやいや、先輩に限ってそれはないや。

「まあとにかく勉強はみてやる。だからとりあえずお前ら、教室に  
いっとけ。俺まで遅れちゃうから」

「わかりました」

「はい」

先輩に言われたとおり、三崎さんとわたしは教室に戻ろうとして、

「あ、そうだ。一色」

先輩に呼び止められる。

三崎さんが先に教室に戻って、外には先輩とわたしだけ。

これはもしかして……？

思わぬかたちで、先輩と休日に会う約束をできて少しだけ舞い上  
がってたわたし。

そして、先輩に呼び止められたら期待していなくても期待しちゃう  
わけ。

「お前、よく三崎と模試の勝負しようと思ったな」

「え？」

感心したようにわたしを眺めながら放たれた言葉に、急に不安にな  
る。

この次の言葉に何が来るか、容易に想像がついてしまう自分がい  
て。

まさか、ね？ そんなね？

「あいつのこの前の模試、県でもトップクラスだぞ」

「……………まじですか」

「まじ。まあ頑張れ」

唐突に突きつけられた現実に、わたしは絶望しながら天を仰いだ。

「勉強、しなきゃ……………」

日曜日。

わたしは、ある理由で朝早くから碧と図書館に来ていた。

「ねーねー、なんで勉強するのにわざわざ図書館なのよ？」

「しーっ。静かにして。気づかれちゃうから」

そう、今日は何を隠そう先輩と三崎さんが一緒に勉強する日。

独自ルートから今日ここで先輩たちが勉強会を知って、こっそり着いてきてみたわけで。

「気づかれるって誰に？ ……あつ……そういうことね」

碧が離れた席に座っている先輩と三崎さんの姿に気づく。

二人を見たあと、一瞬にやつとした気がしたけど、そこは今回は大目に見ておくでしょう。

あ、まだニヤニヤしてる。

えいっと右手で碧の頭に軽いチョップを入れてからちいさな声で話す。

「そういうことです。だから静かにお願い」

「はいはい。てかあんた、これストーリー——」

「ち・が・い・ま・す！」

べ、別に先輩たちがどんな勉強するか気になっただけで。

それに、先輩が女子高生と二人きりになって何するか心配というか。

ほ、ほら、最近は教師とかの生徒に対する性的犯罪が増えるし！

まあ先輩にそんな度胸があるとはまったく思えないけど……。

それでもね、一応ね？ 万が一っていうこともあるし。先輩にそんな気がなくても、三崎さんから襲いにかかるってこともあるわけで。

「これはね碧。その、あれよあれ」

「どれよ？」

「と、とにかく、これは必要なことなの。別にやましい気持ちがあつてやってるわけじゃないから」

「そんな、サングラスにマスク姿の格好で言われてもまったく説得力

ないけどね？ あと帽子も取って。暑苦しいから」

「はい……」

渋々わたしは、碧に言われたとおりに変装セットを外して、隣の椅子の上に置く。

せつかく準備したのに……。

「とりあえず、あんたもせつかく図書館に来たんだし、勉強しなよ」

「う、うん」

「あとはあたしが見とくから。なんかあったら教えるよ」

「わかった……ちゃんと見ててね」

しばらく見張っていても、二人に何かありそうな気配はなさそうだった。

まあ図書館だしそうだよな。

それからは碧に言われた通り、わたしも自分の勉強に集中することにした。

わからないところとかは、碧に聞いたり、図書館の本で調べたりとわりと充実した勉強時間で、気づくといつの間にかお昼になっていた。

「あ、いろは」

「何？」

「先生たち動くみたいだよ」

碧の言葉で先輩の方を見ると、荷物をまとめ終えて外にでるところだった。

「わたしたちも追うよ！」

「え、これどうするの？」

「えーっと、じゃあ碧片付けお願い！ わたし先輩追うから。あとでメールして！」

「はあ……、わかったわよ。いつてらっしやい」

「ありがと碧！ 愛してるからっ！」

荷物を碧に任せ、最低限の持ち物だけ持ってわたしは先輩たちのあとを追う。

歩きながら変装セットを装備しなおして、図書館の外に出たところ



で二人が何か話してるのが聞こえる。

「あ、あの……お昼どうしますか……?」

「んー……、そうだなあ」

「よければ、近くに私のオススメのお店があるんですけど」

「あーじゃあそこでいいぞ。あんま遠くてもあれだし」

「はいっ」

どうやらお昼のお店が決まったみたい。

それにしても三崎さん本当に嬉しそうだなあ……。先輩は相変わらずだけど。

そのまま二人の後を電柱や看板、壁を上手く利用し、まるで名探偵のような動きで二人を尾行していく。

二人で並んで歩く姿はあまり見たくないけど、これも仕方ない。

それにしても、やっぱり先輩は先輩だなあと思う。

歩く速度は三崎さんに合わせてるみたいだし、さり気なく車道側を歩くところとか。こういう地味な気遣いっていうのはやっぱり女性にとっては嬉しいことで……。これ絶対三崎さんのポイント上げちゃってるなあ。

「今日はその、本当にありがとうございます」

「ん? ああ、まあ気にしなくていいぞ。別に休日とか暇だし」

「そうなんですね……」

つと、もう会話終了ですか?

三崎さん、先輩相手に自分から会話切っちゃ話し続かないよ?

ただでさえめんどくさがりなんだから。

それから二人が会話することなく、淡々と歩いていくだけだった。

その間もわたしは二人に気づかれることなく尾行を続けた。

もしかしてわたし、こっちの才能があるのかな?

そんなふうに分身の隠された才能を感じながら尾行を続けていると、二人がお洒落なレストランの前で立ち止まった。

「こ、ここがそうです」

「へえー、立派なところだな」

「最近できたんですよ。それじゃいきましょ」

最近できたのに行き着けていうのは……？　というツツコミはやめておいた方がいいかな。

とりあえず碧に位置情報をメールしてつと。

「いろはー！」

「あ、碧。こーん、こーん」

先輩たちが店内に入ってから数分後に碧がやってきた。

二人で店内に入り、先輩たちに気づかれないように近くの席に座る。

「結構良さげなところね」

「そうなんだよねー。たぶん前もって調べておいたんじゃないかな？」

「先生が？」

「そんなわけではないですよ。三崎さんがだよ」

先輩がそこまで要領いいはずないですよ碧さん？

「じゃあとりあえず注文しよっか」

「うん、だけど碧」

「ん、なあに？」

「もうちよつと声抑えてね？　碧の声結構大きいんだから」

「そんなに大きいかな……？　まあわかったよ」

一応碧に一言注意して、店員さんと呼ぶ。

二人とも同じクリームパスタを注文して、食後にフルーツパフェを頼む。

待っている間、先輩たちを観察しながら尾行中の話を碧に報告することにした。

「ふくん、なるほどねえ」

尾行中の出来事を一通り碧に報告すると、コップに入った水を一口飲むながら碧は少し退屈そうな反応を示す。

まあ実際、特になにかあったわけでもないし、この反応は普通かなあなんて。

「おまたせしました」

話が終わると、ちょうどタイミングよく店員さんが注文した料理を運んできてくれた。

「おお、美味しそうだね」

「うん、さすががこの日のために三崎さんがリサーチしただけのことはあるかな……」

「それホントなのー?」

「だって最近できたばかりなのに行きつけてなんかおかしくない?」

「んーそうかな?」

「そうだよ。だったら今日のために調べてたと思った方がしつくり来るよ」

わたしだったらそうするし。

……いや、わたしだったら先輩に選んでもらっちゃう気がする。

それじゃだめなのかな。……うーん、わたしも先輩とのお勉強会の時に備えてお店探してみようかな。

もし探すとしたらどういふところがいいんだろ。

……ダメだ。ラーメン屋かサイゼくらいしか先輩の喜びそうなところ思い浮かばないよ……。

「ん、これめちやくちや美味しいな」

「ほ、ホントですか?」

「ああ、あんまこういう店来ないけど、たまにはこういうところもいいなと思えてきたわ」

「よかった……先生にそう言ってもらえるの、凄く嬉しいです」

わたしたちより先に料理が運ばれた先輩たちは既に食べ始めて。  
て。

「うーん。なんか楽しそうだなあ……。いいなあ、わたしもあつちに行きたい……」

「あのね、碧」

「ん、なあに？」

「人の心読んだみたいなたい台詞、やめてもらっていいかな？ わたし全然そんなこと思ってないし、それになんでわざわざ三崎さんと三人でご飯食べなくちゃいけないの？」

まあ確かに楽しそうだなあとは思いますが、あそこに混ぜりたいたいとかそういう気持ちはない。三崎さんと入れ替わりたいたいとは思いますが。それかこの目の前にいる碧と先輩、チェンジでお願いします。

「そういうえば、三崎」

「は、はい」

「どうして一色と模試の勝負なんてすることになったんだ？」

「あ、えつと……」

「一色からなにか言われたのか？」

ちよつと待つてください先輩。

その言い方だとわたしはがなにか悪いみたいなんですけど？ 元々

三崎さんがわたしに——ちよつかいだしてきたというか。

「い、いえ、勝負を持ちかけたのは私のようなものですし……。一色さんと、全力で戦ってみたいと思って……」

試験じゃなくて恋愛でだよな？ なんてツツコミは心の中にしまっておく。

「まあでも、今のままじゃ勝負になるか怪しいところあるけどな」

「そうなんですか……？」

先輩の言葉に三崎さんが不安そうな顔で尋ねる。

「あ、いや、三崎に不利なことじゃなくてな。その逆だ。今の一色の成績だと、三崎の圧勝っぽいからな」

「そ、そうなんですか」

その言葉を聞くと、三崎さんの表情がパアッと明るくなって、テー

ブルの下にある手が小さくガッツポーズするのをわたしは見逃さなかった。

ぐぬぬ……。本当のことだからなにも言えないけど……。先輩にそう言われるとやっぱり悲しいというか。ちよつとだけ切ないものがあつて……。

「ほ、ほらいろは。冷めないうちにたべちやおう？」

「う、うん」

先輩の言葉に今度はわたしが落ち込みかけていると、碧が声をかけてくれる。

「うん……。悔しいけど美味しい……」

「だね、今度は美智子たちも連れてきて一緒に来ようよ」

「そうだね、あの子パスタとか好きだし、喜ぶよきつと」

予想以上に美味しく、先輩たちより先に食べ終わったわたしたちは食後のパフェを頼む。

と、同時に先輩たちも食べ終わったみたいで。

「あー、美味かった。んじや戻るか」

や、先輩もちよつと待つてくださいお願いします。せつかくなんでパフェを食べさせてください！

大体、食べてすぐ帰ろうとするとか、少しはこう、なんていうか余韻的なものを味わったりしないのかなこの人は。……うん、しなさそうだ。

「あ、も、もう少しいませんか？ デザートとかも美味しいんですよ、こー」

「そうなのか、んじやせつかくだし何か頼むか」

三崎さんナイス！

三崎さんの提案で、先輩たちもデザートを頼むことになったみたいで一安心。

そのまま、先輩と三崎さんもデザートを注文して。

「さっきの続きだけど」

「はい？」

「今の一色じやたぶん三崎の圧勝だと思うが、油断はしないほうがい

いぞ」

「と、言いますと……？」

「あいつは、まあ普段はあんまりやる気無かったりするが……そのな  
んだ、やるときはやる奴だからな」

先輩……。

やばい……。先輩にそう言ってもらえるだけで、凄く嬉しい。

先輩の期待を裏切りたくない。

「……随分、一色さんの評価高いんですね……」

「まあ短い付き合いでもないしな。あいつが勝負を受けた以上、本気  
でやるんじゃないか？」

「そう、ですか……。わかりました。私もこの勝負、本気でやります」

「まあせっかくの勝負なんだしな。本気でぶつかり合ったほうがいい  
だろ」

「はい」

二人の話を聞き入っていて、既に運ばれていたフルーツパフェは溶  
け始めていた。

でも、今のわたしはそれよりも別のことに意識がいつてて。

「碧」

「んー、はあに？」

目の前でお気楽にパフェを頬張っている碧。ホントこの子は……。

「わたし、今日はもう帰るよ。付き合ってくれてありがとう」

「もういいの？」

「うん、せっかく先輩がこう言ってるのに、こんなことしてたらいけな  
い気がするから」

「そっか。うん、そうだね。頑張れ、いろは」

「うん、頑張るよ」

できるだけのことをしよう。

先輩がわたしのことを評価してくれてるから。

それが間違ってたなかったって思ってもらえるように。

三崎さんと先輩が図書館で勉強をしてから一週間が経った日曜日の朝。

今日はやつと、わたしが先輩に勉強を見てもらえる日だ。

「あ、もうこんな時間だ……」

部屋の時計を見ると、先輩との待ち合わせの時間までそんなに余裕がなくて。

眠気を堪えて洗面所に顔を洗いに向かう。

今日は気合入れないとね——

「ぎゃああああ！」

「どうしたのいろは!？」

わたしの悲鳴にお母さんが慌ててやってくる。

「お、お母さん……な、なんでもないの、ごめん」

「そ、そうなの？ あら、いろは、その顔……」

「やっぱりひどい……?」

「かなりね……」

そう、わたしが悲鳴をあげたのは鏡に映った自分をみたせい。

最近、毎日のように遅くまで勉強をしていたせいか、顔を見ると目元に見事すぎるくらいのカマができて……。

せつかく先輩と会えるっていうのになんでこうなっちゃうかなあ……。

こんな顔先輩に見られたくないよ……。

仕方ない……こうなったら……。

\* \* \*

「おまたせしましたっ先輩!」

既に待っていた先輩に明るく声をかける。

なんとか待ち合わせの十分前に到着できてよかったあ。

「おう、意外と早かったな——って誰?」

「わたしですよわたし！」

「何？ ワタシワタシ詐欺かなんかなの？」

「違いますよー、一色いろはです！」

「悪い、知らない人だわ」

「それはひどくないですか!？」

「俺の知り合いにお前みたいなのがギャルっぽいやっついなんだけど……」

先輩がわたしの服装を見ながら若干引き気味にそう告げる。

うう……だからこの格好はしたくなかったのにー！

目元のクマを隠すため、わたしはサングラスをつけることにしたんだけど。

あまりにも立派すぎるクマを隠すためには、少し大きめのサングラスをするしかなくて……。

そうすると、今度はいつもみたいな服装だとサングラスが完全に浮いちやうから仕方なく、ね……。

「どうみても、これから勉強するやつは格好には見えないんですがそれは」

「先輩、人は外見で判断してはいけないんですよ？ わたし、勉強する気しかないですからー！」

「説得力ないなホント……」

「小さいこと一々気にしないでください！ そんなんじゃモテませんよー！」

「はあ……。わかったわかった。んじやとりあえず行くか」

「わかればいいんですわかれば。じゃ、行きましょー！」

ふふ、どうやら上手く誤魔化せたようですね。

と、どうにか服装の件を納得させて、わたしたちは図書館に向かった。

待ち合わせ場所から数分歩くと、先週先輩たちが勉強するのに利用していた図書館が見えてくる。

図書館なんて普段はまったく来ないのに週一ペースで来るなんて、



わたし受験生なんだなあ。

先輩を先頭に図書館の中に入る。

中はクーラーが効いてるおかげでひんやりとじていて勉強にはもってこいの環境だ。

「ん〜、涼しいですね」

「あんま大きい声出すなよ」

「はい。あ、そこ空いてますよ」

奥の方の席が空いていたので、二人で一緒に座る。

「んで、なんの勉強するんだ？」

「それはもちろん、現文ですかね」

「ああ、まあそれなら見てやれるな」

「はい、よろしくですっ」

それから一時間くらいたつたかな？ 先輩とみっちり現文を勉強していると、先輩がチラチラとわたしの顔を覗くようになってきて。

「どうしたんですか先輩？ もしかしてわたしに見惚れてたとか？」

「ちげーよ。なんでお前勉強中もサングラスかけてるの？ 気になっちゃうんだけど」

「あ、そっちですか……」

まあたしかに、図書館でサングラスなんてしてる人がいたら、わたしも多少なりときにするかもしれないませんが。

でも今はそこには触れてもらいたくないわけで。

「そ、それより、ここがわからないんですけど！」

「だから大きい声出すなっつうの……。ここは——」

あぶないあぶない。

勉強の話題に変えたおかげで、サングラスに対する興味はなんとかなくせたみたいだ。

それからはなんとかサングラスについては語ることなく、順調に時間は過ぎていって。

「そろそろ昼にするか」

「そうですね。結構ガツツリやりましたもね」

「だな。それにしても一色も結構現文できるんだな」

「塾の先生が優秀なおかげですよ、きつと」

「……褒めても昼は奢らないぞ」

「ちつ……」

「おい」

なーんて。実際、先輩の教え方はホント上手ですよ。

先輩のおかげで教えてもらったところはほぼ理解できてきたし。

毎日勉強頑張ってるのもあるけど、やっぱり先輩の存在は大きい。

「冗談ですよ冗談。先輩のお財布事情が厳しいのはわかってますんで」

「お前の言い方冗談に聞こえないから怖いんだけど」

「そういうこと言うと、ホントに奢ってもらいますよ?」

「悪かったよ。んで、何食うんだ?」

「そうですねー。ラーメンでいいですよ」

「え、いいの?」

「はい、久しぶりに食べたいなって」

「ほう、一色もラーメンの良さに気づき始めたのか。俺は嬉しいぞ」

「そういうのはいいですから……。美味しいところ連れてってくださいね?」

「おう、任せろ。んじや準備していくとするか」

ラーメンの話題が出たとたん、目に見えるくらい機嫌がよくなる先輩。

ホント、先輩ってラーメン好きなんだなあ。……手作りラーメンとかわたしが作ったら美味しいって言ってくれたりするのかな……?」

「ほら、一色、早く行くぞ」

「あ、はい、待ってくださいよー」

いつの間にか片付けを済ませてた先輩に追いつくように、急いで図書館を出る仕度を済ませ、駆け足で先輩のもとに向かった。

「着いたぞ、ここだ」

「へえー、結構並んでるんですね」

先輩お勧めのラーメン屋さんの前に着くと、お昼時ということもあつてお客さんが列を作っていた。

「ここは何が美味しいんですか？」

「そうだな、ここはラーメンも美味しいんだが、お勧めはつけ麺だ」

「つけ、麺……？」

つけ麺とは……？ あ、あの狩野○光さんがネタでやる？

えっと、どんなのなんだろう？

「お前……まさか、つけ麺知らないのか？」

「えっと……はい」

「お前は間違いなく人生の半分損してるぞ。つけ麺食べたことないとかありえないだろ」

「いや、さすがにそれは言い過ぎじゃないですかね？」

そもそもラーメンだって滅多に食べないし……。

というか、先輩の目が若干マジで怖い。

あと顔近いです。嬉しいですけどちよつと今は無理ですごめんなさい。

「言い過ぎなもんか。まあでもつけ麺初体験がこの店ならお前は幸せ者かもな」

「はあ。そんなですか」

「まあ食べてみればわかる」

そこまで言われると、楽しみになってくるわけで。

実際前に先輩と食べたラーメンも美味しかったですし。

先輩がここまですうつてことは本当に美味しいんだろうなあ。

「お、そろそろ俺たちの番だ。食券買うぞ」

「あ、はい」

まるで子供のように目を輝かせる先輩。

いつもはどよーんと濁ってる目も、今はキラキラと……あ、やつぱ

り普通に濁ってる。わたしの勘違いだったね。

販売機の前に一緒に並んで先輩と同じつけ麺を購入して店員さんにあらかじめ渡ししておく。

食券を買ってから少し待つと、カウンター席が空いたので二人で並んで座る。

すると、ほとんど待たずに頼んでおいたつけ麺が二人の前に置かれた。

「へー、随分早いですね？」

「つけ麺は元々時間がかかるからな。その対策として、待つてるあいだに食券を渡し、ある程度作っておくことで効率をよくしてるんだ」「お店側もいろいろと工夫してるんですねー」

「このクラスの人気店にもなると、そうしないと上手くさばけないんだろつと、とりあえず食べようぜ」

「では、いただきます」

「の前に」

「はい？ なんですか？」

つけ麺を食べようとすると、先輩が急に割って入ってくる。

なにか食べる前にすることかあるのかな？

「お前、それつけたまま食べるのか？」

「え？」

「マスクとサングラス」

「あ……は、外します」

さすがにマスクしたままはね？ と、マスクを外して再びいただきますをする。

「サングラスはとらないのな……」

「細かいことはいじやないですかー」

「なんか気になるんだよ……」

「ハッ!? もしかしてそれはあれですか？ 遠まわしにわたしの素顔を見たいってアプローチですかすみません今はどうしても先輩に素顔を見られたくないのでまた後日ということをお願いしますごめんなさい」

「だからなんで俺が振られたみたいなき感じになっちゃってるわけ……」

「まあまあ、さー食べましょう！ 冷めちゃいますよー！」

「お、おう……」

と言つても、つけ麺の食べ方がいまいちよくわからないので、横目で先輩の食べる姿を見つめる。

あ、普通に麺をこのスープにつければいいんですね。

先輩を真似して麺をとろとろのスープにつけて一口。

……美味しい。え、なにこれ？

つるつる、そしてもちっとした麺がとろとろのスープにしつかりと絡まって、絶妙。

鳥のチャーシューはしつとりとした食感で、これもまた美味しい。

予想以上の美味しさにわたしは、初めてのつけ麺をあつという間に食べ終えた。

「どうだ、一色」

お店を出ると、先輩が感想を求めてくる。

「あ、はい。……なんというか、凄い美味しいです」

「だろ？ 他のも美味しいんだぞここは。週一である味噌ラーメンとか月一の限定メニュー、あとは塩ラーメンだな」

「へー、食べてみたいですねそれは」

「絶対食ったほうがいいぞ」

「じゃあ、先輩、また連れてきてくださいね？」

「や、そこは別に一人で来ればいいだろ。もう店わかるんだし」

「えー、だって一人でこういうお店とか入りづらいじゃないですか」

「友達誘えばいいだろ」

ぐぬぬ……あーいえはこういうとはまさにこのことですね……。

遠まわしに先輩と行きたいって言ってるんですよ！ 少しくらい察してください！

「とにかく、先輩はわたしにこのお店を紹介したんですから、一緒に付き合ってくださいよー」

「えー……じゃああれだ。模試で三崎に勝ったらな」

「ホントですか!？」

「おう……勝ったらだからな？」

「聞こえてますよ！ その条件なら先輩の奢りでもいいですよねー？」

「まあその時はな」

「そうと決まればのんびりはしてられませんね！ すぐに戻って勉強会の続きしましょう」

先輩の言葉に俄然やる気が上がるわたし。

元々頑張ってたわけだけど、それプラス、先輩と一緒にご飯を食べるぐ褒美までついてくるならもう、ね？

「ほら、早く戻りますよ、先輩」

「わかった、わかったから袖引つ張らないで？」

早く勉強しなくちゃと、わたしは先輩の袖を引っ張りながら足早に図書館を目指す。

\* \* \*

「お疲れ様でした、先輩」

「おう、お疲れ。随分頑張ったな。そんなにあそのつけ麺気に入ったのか」

「まあそういうことにしておいてください」

つけ麺も美味しかったけど、わたしが本当に頑張ってる理由は先輩なんですよ？ 本人にはまだ言えないけど。

あれからみっちり勉強したわたしたち。

まったりと会話をしながら片付けを始める。

今日は先輩に教わったおかげもあっていつもより捗ったなあ。ありがとうございますね、先輩。

と、心の中で感謝をしつつ図書館をあとにする。

それから先輩が駅までは送ってくれるというので、お言葉に甘えて駅まで一緒に帰ることになって。

「じゃあ、また塾でな」

「はい、今日はありがとうございました」

駅まで送ってもらい、今日のお礼を告げて先輩とはお別れ。

今日は本当に充実した一日だったなあと今日の出来事を思い返しながらわたしは帰路についた。